

# しろあとだより

第6号  
2013年3月  
高槻市立  
しろあと歴史館

## 目次

「高槻藩永井家の分限帳について(一)」西本幸嗣	1
「金龍寺の成立と安満山周辺の地域社会」中西裕樹	6
「都加母止塚について」千田康治	12

## 高槻藩永井家の分限帳について(一)

西本 幸嗣

「分限帳」(ぶんげんちよう・ぶげんちよう)とは、江戸時代、大名の家臣の名前、禄高、地位(家格)、役職などを記した帳面のことである。分限帳によって、藩の職制や家臣数などを把握することができ、藩政を知る基礎資料となる。

高槻藩の職制については、家老以下、各奉行・代官など、役職名は藩士家旧蔵文書で散見できるものの、職務間の支配関係は明確ではない(1)。一方、藩の家臣数については、慶安二年(一六四九)の永井家初代・永井直清入部時に御供をした家臣は一三六名であった(2)。また、同時期の状況を示す城絵図(仏日寺蔵)について、NPO法人高槻市文化財スタッフの会古文書グループと協働で家臣名・禄高を読み解いたところ、一二〇名の家臣の名が確認できた(3)。禄高別の家臣区分は、下表のとおりである。千石以上を有する藩士は、一名で、家老格にあたる。家臣団の七割強を占める八十七名が、百石から三百石を有する藩士であることがわかった。

さて、ここで紹介する分限帳は、史料名「御当家古分限帳」といい、藩士家に旧蔵された史料である(4)。横帳形式で縦一七・二cm×横一一・三cmの小型で手控えの大きさになっている。

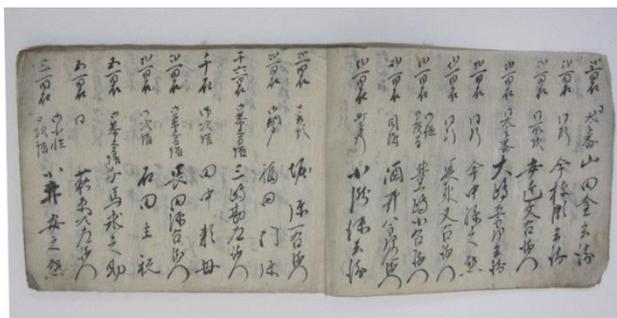
禄高	人数
1000石以上	1
500石～1000石	5
300石～500石	4
100石～300石	87
50石～100石	21
10石～50石	0
50人扶持	2

高槻藩禄高別家臣構成(城絵図より)

本史料には、帳末に「寛文戊辰改有之候写者也」とあって、寛文十年(一六七〇)に改められた分限帳を書き写したと思われる。翌年正月九日に初代直清が死去したので、代替わりの際に、直清の家臣団を記したという意味を込めて「古分限帳」と記したものと推測される。諸藩によっては、五年ごとなど定期的に分限帳が新調される場合もあるという。

本帳の構成は、禄高をもつ藩士を冒頭に、無高で扶持米支給の藩士・足軽やお抱えの医師・職人・町人などを列記している。帳末には、藩領内の組村や人数書きなど、藩士としての必携すべき備忘録となっている。

今回は、分限帳の前半部分を紹介する。ここに記された藩士名を、前述した城絵図と比較すると、人物名はほぼ一致した。禄高を有する藩士一五四名を記す。多少の増減はあるものの、初代直清の時代の家臣団といえる。本帳には、禄高と藩士名に加え、役職を記している。職制については、一般的に、軍事を担う番方と、行政を司る役方に大別される(5)。物頭・使番などは軍事のときに活躍する番方である。一方、普請奉行・郡奉行・代官などは、役方にあたる。諸藩においては番方のほうが役方より地位は高いことが多い(6)。高槻藩においても、者頭(物頭)で大手番などは、禄高四百石・五百石と高く、代官などは五〇石と低いことがわかる。禄高の多い藩士の一覧を表にまとめた。一番大きい禄高は、千六百石の



「御当家古分限帳」(当館蔵)

三嶋勘右衛門である。この人物は、直清の高槻入部の際、神足館（長岡京市）から筆頭に供奉した者で、直清の右腕的存在といえる。家臣団のなかで、他に類をみない大禄高を有する藩士である。

三嶋氏と同じく家老格であったのが、田中頼母である。また、片岡氏・内藤氏・長田氏・服部氏は、分限帳で者頭・大手番の役であり、城絵図には、「足軽大将」と記された番方の上級家臣といえる。そして、彼らの子息の名前も本稿の紙

面最後に列記されている。これは「御目見給人」といい、藩主に御目見できる家の子息で、禄高も多く、家臣のなかで格式が高い家柄を表している。他に、江戸や京の留守居役から、祐筆や医師、鷹師などの藩御用の者まで、高槻藩に関わる様々な役職を知ることができる。史料の後半は、次号に掲載させていただき、藩研究の基礎資料として活用されることを期する。また、今後、引き続き、時代を追って他の分限帳も紹介したい。

禄高	藩士名
1600石	三嶋勘左衛門
1000石	田中頼母
500石	千馬求之助
500石	萩原次左衛門
500石	片岡安右衛門
500石	内藤勘右衛門
400石	長田三郎兵衛
400石	服部惣兵衛
300石	吉澤八弥
300石	小森安之丞

高槻藩禄高の多い藩士（本分限帳より）

貳百三拾石	御側勤	新家吉左衛門
貳百石	御旗無番	桐山五郎左衛門
貳百石	者頭土蔵	三嶋仁左衛門
貳百石	同 大手番	山田金兵衛
貳百石	同断	今枝瀬兵衛
貳百石	同取次	安達文右衛門
貳百石	同大手番	大嶋五郎兵衛
貳百石	同断	今中孫之丞
貳百石	同断	長束又右衛門
貳百石	御継	豊嶋小右衛門
貳百石	御廣間	酒井八郎左衛門
貳百石	目附	小瀧源兵衛
貳百石	町奉行	堀 源一右衛門
貳百石	御取次	福田 門弥
貳百石	御納戸	三嶋勘左衛門
千六百石	御茶之間詰	田中 頼母
千石	御次詰	長田源右衛門
貳百石	御茶之間詰	石田主税
貳百石	御次詰	千馬求之助
五百石	御茶之間詰	萩原次左衛門
五百石	同	
三百石	御小性	小森安之丞
三百石	御次詰	同 吉十郎
貳百石	同	片岡勘五郎
貳百五拾石	御小性頭	檜垣左伝次
三百石	小性	田中一学
三百石	同	吉澤八弥
貳百石	同	杉田萬助
百五拾石	同	神保小源太
百五拾石	同	堀内三弥
百五拾石	同	山中金弥

御当家古分限帳

大北所持

五百石	者頭	内藤勘右衛門
五百石	大手番	片岡安右衛門
四百石	同	長田三郎兵衛
四百石	同	服部惣兵衛
貳百五拾石	御広間番	龍川茂右衛門





但、百石ニ付、米四拾石ツ、  
外ニ

小塚万作ト云兒  
百石 小姓を養子ニ被

仰付、終ニ不快ニ依テ

万作ヲ紛置退ク

戊春死去

百石 跡式不被下

倅又四郎退出ス

五人扶持

同斷

拾人扶持

五人扶持

式人扶持

三人扶持

式人扶持

式人扶持

式人扶持

四拾石

同式拾石

同拾石

同拾石

同五石

同五石

同五石

同五石

人数合拾五人

御合力米ノ九拾石

但百廿六人扶持

米式百式拾六石八斗

但、壹人ニ壹石八斗宛之積リ

御目見給人子共

三嶋甚之丞

萩原三五郎

服部孫平次

片岡平六

三嶋平左衛門

山田弥一郎

安達源太夫

高津又右衛門

福田千松

竹嶋清三郎

鷲見十之丞

能勢權之助

海北源之丞

多田道伯

千馬百助

長田弥五助

片岡源三郎

羽山孫兵衛

今枝市郎右衛門

今中孫九郎

坪井新八

礪貝又六

佐野三十郎

恒岡孫左衛門

三好又助

山下佐五右衛門

笹部春庵

ノ式拾七人

※以降、次号に続く

【註】

(1) 『高槻市史』第二卷本編Ⅱ(昭和五十九年、高槻市)。天坊幸彦氏の図示した「高槻藩の職制」(『高槻通史』)を引用するが、出典など不詳で、いつごろの職制か、国元と江戸詰との区別がないなどの指摘がある。

(2) 「永井直清高槻入部御供の次第写」(長谷川家文書、『高槻市史』第四卷(二))。慶安二年(一六四九)八月二十五日、永井直清の初入城の様子を伝える史料である。

(3) しろあと歴史館で開催した第十四回企画展「たかつき歴史探訪く市民ボランティアおすすめ文化財展」(平成二十一年七月・八月)において、「高槻城絵図」「町間入高槻絵図」(ともに仏日寺蔵)を翻刻するとともに、データを集計し、図表化した。

(4) 大北家旧蔵文書。藩の徒士目付を勤めた高槻藩士家である。ただし、本分限帳には名前が確認できない。

(5) 岩城卓二「武士の家」(『図説 尼崎の歴史』上巻(平成十九年、尼崎市)所収)。

(6) 前掲(5)。尼崎藩の事例を紹介されている。

## 金龍寺の成立と安満山周辺の地域社会

中西 裕樹

### 一 はじめに

金龍寺は、本市東部に位置する安満山の西斜面(標高二二〇メートル)に所在した山岳寺院である。邂逅山紫雲院を号して天台宗に属し、普賢菩薩を本尊とした。大字成合に属し、中心部の小字を「内供谷」という。この字名は、康保元年(九六四)に金龍寺を建立した僧千観にちなむ。伝承では古代の安満寺を前身とし、近世は百人一首で名高い能因法師ゆ

かりの地として、また桜や松茸狩りの名所として親しまれた。往時は豊臣家による復興を伝える開山堂や方丈、経堂等が建ち並んだものの、明治には無住となり、昭和五十八年の火災で建築物や什宝を焼失した。現在は境内の平坦面や石垣等が残るのみである。

金龍寺と千観については天坊幸彦氏、河音能平氏、滝沢幸恵氏らが考察を加えている(1)。特に千観に関しては、平安時代中期の聖として、注目がなされてきた。しかし、中世以前の寺の実態については不明な部分が多く、遺構や成立背景に関しては考察の余地もあるように思う。

近年、第二名神高速道路の建設に関連し、安満山山麓では発掘調査が実施され、古代〜中世に至る興味深い資料が得られた。また、西麓の成合村は安満山にまつわる民俗行事を伝え、南麓の安満村には神体を安満山とする磐手杜神社が所在する。これらの評価は、金龍寺を含む安満山周辺地域として総合的に考える必要があるだろう。さらに遡れば、安満山南麓には弥生時代の大規模な環濠集落が営まれ、安満山には三世紀に安満宮山古墳、六〜七世紀には群集墳が築造されてきた背景を持つ。



図1 金龍寺と安満山周辺地域 (高槻市史第3巻付図「高槻市大字・小字図」に加筆)

そこで、小文では先行研究や近年の調査結果に拠りながら、金龍寺を概観する。そして成立期の金龍寺を念頭に置き、安満山周辺の地域社会との関係にアプローチしてみたい。なお、以下では、図1を適宜参照された。

### 二 金龍寺の概要

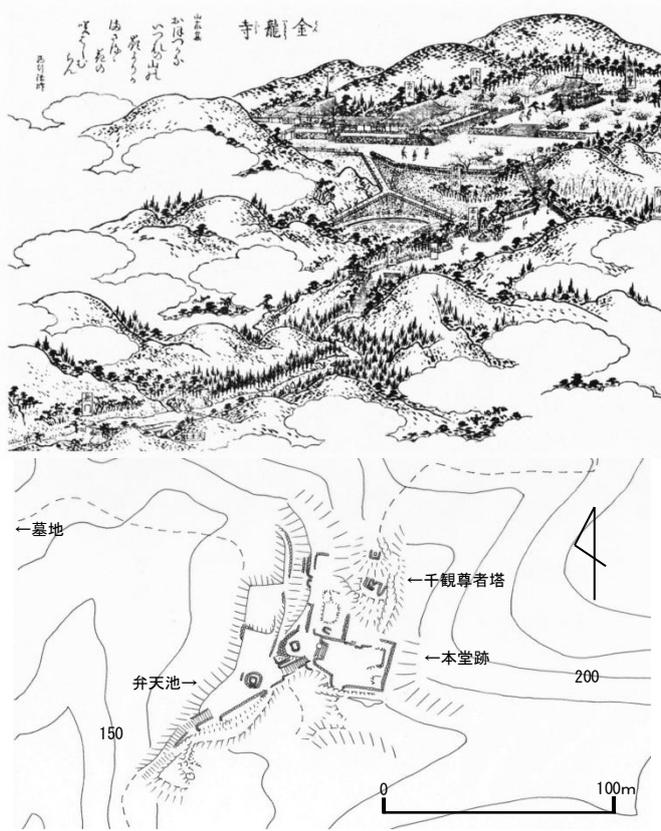
#### (一) 安満寺と金龍寺

延暦九年(七九〇)、桓武朝に仕えた阿部(安倍)兄雄は、「安満寺」を創建したと伝わる。兄雄の家系は、六四五年の大化の改新で左大臣に就任した阿部倉梯(内)麻呂に連なり、平安中期の陰陽師安倍清明は子孫とされる。元禄十三年(二七〇〇)の奥書を持つ「金竜寺縁起」(2)によれば、安満寺は坊舎十九宇を持つ巨利であった。

十世紀頃に安満寺は荒廃したが、康保元年(九六四)に千観が中興し、避  
 逅池から金龍が現れる奇瑞を受けて金龍寺へと名を改めたという。金龍寺  
 の史料上の初出が同四年の『日本紀略』(3)であるため、千観による金龍  
 寺建立時期は概ね首肯されている。

千観は皇族氏族の橘氏の出身で、延喜十八年(九一八)生まれであった。  
 祖父は藤原純友の乱で功績をあげた橘公頼、曾祖父は藤原基経と宇多天皇  
 との政治抗争「阿衡事件」で処罰を受けた橘広相である。園城寺で天台密  
 教を修行し、天慶九年(九四六)に即位した村上天皇の代には内供奉十禅師  
 となつて宮中での仏事に携わるなど、天台宗の学僧として栄達した。

しかし四十代の頃、千観は摂津国の箕面山観音院へと隠棲し、浄土信仰  
 を深めていく。鴨長明による『発心集』(二二四、一五年成立)では、そ  
 の背景として「市の聖」空也との出会いが語られ、以降の千観は『十願発  
 心記』などを執筆するとともに、「阿弥陀和讃」を介して民衆への布教に  
 力を注いだ。そして、西方への眺望が優れた地を求めて金龍寺に移り、沈  
 む夕日に阿弥陀如来を観る「日想観」を行ったという。



上：図2 摂津名所図会の金龍寺 下：図3 中心部概念図

平安時代の金龍寺については、河本能平氏が保安元年(一一二〇)「撰津  
 国正税帳案」等の記載から撰津国衙から毎年千束の稲が支給される地方官  
 的存在であったと評価している(4)。ただし、以降の詳しい事象は不明で、  
 中世に安満庄内に八反半余りの免田を有し(5)、戦国時代に大坂本願寺か  
 ら証如が花見に訪れたことが知られる程度である(6)。

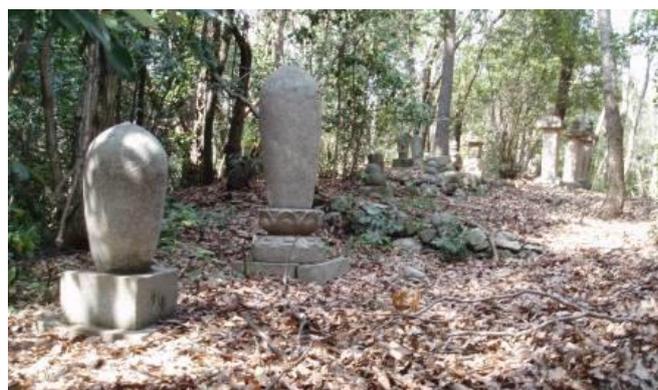
(二)境内と遺構

さて、金龍寺の境内については、寛政十年(一七九八)刊の『撰津名所図  
 会』(以下『図会』)の挿絵で紹介されている(図2)。概ね、これが現状で  
 遺構が確認される範囲であり、『図会』が描く区画や礎石で建築物の跡を  
 追うことができる(図3及び写真1、4。以下「中心部」)。

金龍寺川が流れる谷あいには惣門が設けられ、今も丁石が残る参道を上つ  
 た地点に方丈や開山堂等の堂舎が並んでいた。ここは山腹を拓いた平坦地  
 であり、最奥に「当山開祖千観尊者塔」が立つ山を背負って本堂が建てら  
 れた。このような建物や平坦地のあり方は典型的な山岳寺院の構造である。  
 なお、『図会』では、金龍が昇ったという「弁天池」を描き、この東の「池



上：写真1 参道と石垣 下：写真2 千観尊者塔



上：写真3 弁天池周辺 下：写真4 墓地

之坊」の地に千観は庵を結んだとしている。また谷間にも大きな蓮池が描かれている。後者は土砂に埋没しているが、この付近が現在でも金龍寺川の水源になっている。

中心部の周辺には『図会』が描かない階段状の地形も認められ、寺院に関する平坦地の可能性がある。特に堂舎が所在した平坦面の北西に谷を挟んだ尾根上には石垣と平坦地が確認できる(図化は未)。古い地図には墓地の表記もなされており、現状でも元禄、享保、元文など江戸時代の年紀を持つ僧侶の墓石が並んでいる。

また、地元で伝来している文化十二年(一八二九)の「金龍寺境内略小図」(7)は中心部の堂舎を立体的に描き、それを囲む形で惣門から黒線が引かれている(図4)。他にも広く山裾に及ぶ範囲を囲む黒線が「寺領」の「堺」を示すとともに、明示する道や谷、標識等が書き込まれ、「安満之村山」「成合村山」等とは区別された。近世における金龍寺は、安満山一帯の広範囲を寺域と認識していたことがわかる。

平地に関しては、安満集落の小字「仙観」は「千観森」と呼ばれ、千観

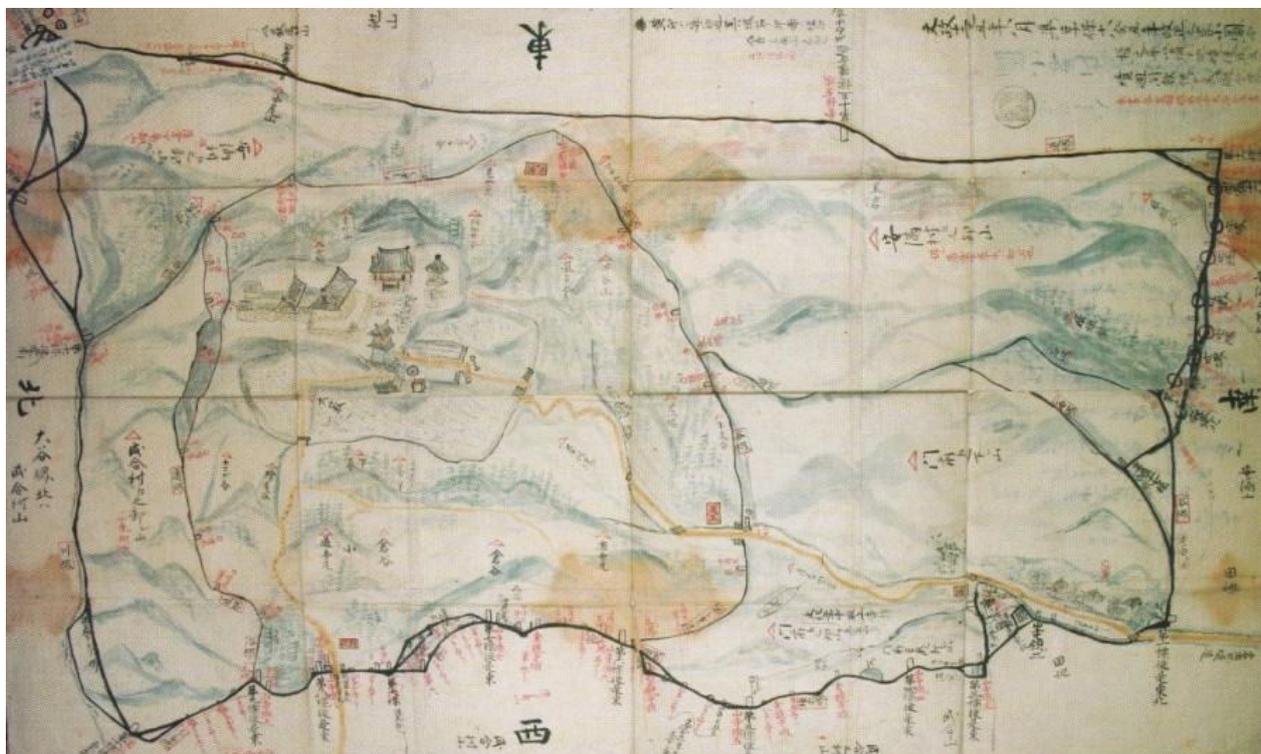


図4 金龍寺境内略小図(個人蔵)



写真5 安満山(市営墓地)から大阪方面の眺望

の旧棲地と伝承される。かつては千観神社が所在していたが、現在は磐手杜神社に合祀された。河音能平氏は、ここに金龍寺の里坊を比定し、近く(8)の山陽道(西国街道)を往来する民衆への千観の布教を想定している(8)。金龍寺関連の施設は、安満山の麓にも存在していた可能性は高い。ただし、遺構の全貌は中世、そして前身とされる安満寺を含めて未だ不詳である。なお、『図会』では「金龍寺より六町計り巽の方山峰にあり。石垣の遺跡、又敷石の崩れ多し」という「僧屋敷」を安満寺の故地とし、「此峯より西南の方晴れわたりて、浪速及び尼崎の海上遙に見えて、眺望斜ならず」とする。この記述に基づけば、安満寺は安満山山塊のピーク(小字「馬廻り」「水筒峰」「東山」)から市営墓地(小字「辰垣」)にかけての何処かに所在したことになる(写真5)。

### 三 地域の特徴と金龍寺

(一)八世紀後半～九世紀後半の様相

大阪府教育委員会は平成二十三年から金龍寺旧境内跡の発掘調査を実施

し、金龍寺惣門へと至る参道の谷筋入り口付近で遺構が確認され、八世紀後半～九世紀後半と十二世紀後半～十三世紀後半を中心とする遺物が出土した(9)。調査地点の小字は「遍照寺」「門前」で、従来は柵田に利用されてきた場所である(以下「調査」)。ここでは、この安満寺の創建伝承時期とも重なる八世紀後半～九世紀後半の安満山周辺の地域の様相と特徴を確認したい。

遺構は掘立柱建物や井戸、柵列などが検出され、近接する尾根上でも石組を伴う小規模な平坦地が確認されたが、時期等の特定はできていない。一方、遺物は特徴的であり、腰帯の飾具の巡方や須恵質の円面硯、雨乞いの儀札等に使われる大型の土馬、寺院等の建築物の床や腰壁に使用される瓦質の埴、土管等がみられる。これらは一般集落からは出土せず、特に巡方は『令集解』等から従五位以上の官人層が着用したと推測されている。この周辺の山麓に関して、『図会』は「麻茅原」があるとし、金龍寺ゆかりの能因法師が美女の死体を見、歌を詠むと頭をあげて喜んだという地元(10)の伝承を紹介する。また、「御所屋敷」として「磐手故宮」「後鳥羽院ここに行宮し給ふ」という話も載せる。この場所は調査地東南に隣接する現「安満御所の町」付近と思われる。『図会』の安満寺比定地にも近い。これらは伝承にすぎないが、近世の地域の人々が安満山山麓に対して「御所」と呼ぶべき特別な場、そして「荒廃」というイメージを持っていたことを示しており、調査の結果とも整合的に理解できるだろう。

当該期の周辺地域に関しては、調査地から北西約八〇メートル離れた成合の春日神社周辺に悉檀寺が存在したことが知られる。平安時代後期の瓦が採集され(10)、貞観十六年(八七四)の『日本三代実録』には「摂津国島上郡悉檀寺、預之官寺、先是伝灯大律師位園純奏言、先師伝灯大律師位安秘、奉為国家、建此道場、貞観五年太政官处分、為天台別院、望請、改為官寺、詔許之」(11)とある。悉檀寺は官寺に倣う存在であり、貞観五年には天台別院になっていた。それなりの規模の寺院の存在がうかがわれる。また、大規模な開発が進んだ時期でもあり、天長九年(八三二)に撰津国島上郡では、安満を中心に二二三町もの勅旨田が開かれた(12)。勅旨田は空閑地や荒廃田に設定され、開発には公水や諸国の正税等を充てた国家の水田開発推進政策の一環とされる(13)。安満は安満山西麓の成合の小盆地を南流する檜尾川の氾濫原であったが、この流路は小盆地の開口部で地形の傾斜とは異なって山麓に沿うように人工の堤防で東へと屈曲し、勅旨田との関係も指摘されている(14)。

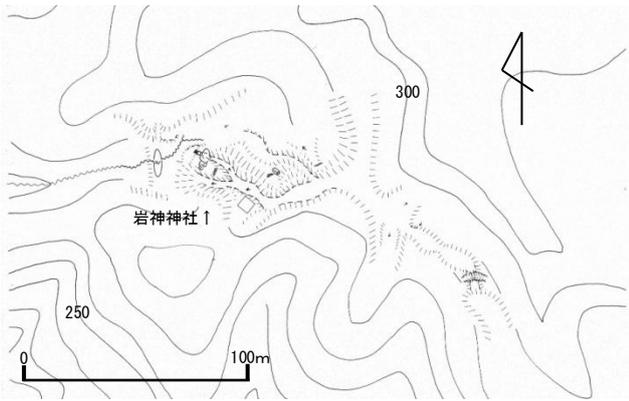
まとめると、八世紀後半～九世紀後半の安満山周辺では、後に金龍寺が営まれる谷筋開口部に「御所」と伝承された格式の高い施設、その近くに官寺相当の悉檀寺が営まれ、かつ大規模な勅旨田開発が進められていた。総じて国家や都の公卿・官人層の強い関与が想定できる地域であり、伝承

される金龍寺前身の安満寺もその一つと理解したい。

(二) 十世紀後半の金龍寺と地域社会

続いて、十世紀後半の千観による金龍寺の成立について、地域社会を念頭に背景を取り上げる。滝沢幸恵氏によれば、千観は淀川・桂川近辺の寺社に祈雨祈祷や治水に関わる伝承を残す(15)。淀川中洲に所在した与杼神社(京都市伏見区)、鴨川に面した愛宕念仏寺(現在は京都市右京区)、勝龍寺(京都市長岡京市)、長法寺(同前)であり、千観は箕面山でも祈雨祈祷を行った。滝沢氏は布教の特徴もふまえ、千観は民衆の生活に直結する治水事業を行っていたと推測している。金龍寺も池から龍が現れた奇瑞が名の由来とされ、千観に水のイメージがあったことは事実であろう。

注目したいのは、金龍寺境内の池付近が先述の檜尾川に合流する金龍寺川の水源という点である。また、その上流では同じく安満山を源とする東檜尾川が本流に合流し、水源に屹立する岩山には成合の春日神社の神体「岩神社」が祀られ、現在も神社の宮座「十老」が十二月に詣でて一年の報告を行う場となっている(図5・写真6)。同社には大正九年(一九二〇)まで行われた蛇を象った雨乞い道具(市指定文化財)も伝わり、当時は



上：写真6 岩神まいり 下：図5 岩神周辺概念図

タライに入れ、神前に持ち帰った金龍寺の弁天池の水に浮かべて使用したとされる(16)。

室町時代に至るまで、成合集落は檜尾川下流の安満集落、古曾部集落と合同で「馬祭」という祭礼を行っていたという。この祭礼は安満山を神体とし、本来は「安満神社」「春日神社」であった磐手杜神社が中心であった(市指定民俗文化財)。この特徴的な祭礼は、かつては成合の春日神社でも実施されており、安満山周辺地域の強い結びつきがうかがえる(17)。この地域社会にとって、岩神や金龍寺はまさに水源であり、霊山であった。先述した八世紀後半く九世紀後半の悉曇寺は成合春日神社、安満寺は安満山にそれぞれ所在地が比定され、勅旨田の開発には檜尾川の付け替えが想定された。背景となった国家や都の公卿・官人層の動きは、地域の水源を掌握するものと読み替えることもできよう。そして調査で遺物が途切れる十世紀、金龍寺を建立したのが治水で知られた千観であった。

金龍寺の成立に、千観の個性が大きく関与したことは間違いないが、慶滋保胤『日本往生極楽記』(九八五-八七年成立)によれば、千観には藤原敦忠娘が帰依していた。藤原敦忠は、藤原撰関家の左大臣藤原時平を父に持つ歌人で、権中納言まで昇進した。また康保四年(九六七)、右大臣藤原師輔の室で冷泉・円融天皇外祖母の故藤原盛子に正一位が追贈された際、宣命使民部大輔源行正は局史生一人を率いて金龍寺に向かっている(18)。藤原師輔は藤原敦忠の従兄弟で撰関家の中心人物であった。

金龍寺が地方官寺の扱いを受けるのは十二世紀初頭で、藤原撰関家領である安満庄の成立時期と重複する。庄域には成合・安満・下・古曾部・別所・野田・東天川・西天川という安満山周辺と檜尾川流域の地域が推定されており(図6)、続く十二世紀後半く十三世紀後半、調査では再び遺物のピークを迎えている。これは九世紀前半の勅旨田の成立と国家や官人層、安満寺や悉曇寺との関係に類似するだろう。確証はないものの、金龍寺の成立と藤原撰関家による荘園領有化の動きはリンクするように思う。

後の十四く十五世紀成立とされる春日社領の安満庄目録には「桧尾金龍寺八反半 同本役沙汰スルトナリ」とある。安満庄は、突出した武家が存在せず、農民的性格が強い地域としてとらえられている。金龍寺に対しては免田の扱いがなされており、安満庄における地域の人々と金龍寺との深い関わりが想定される(19)。なお、かつて官寺に做った悉曇寺も成合春日

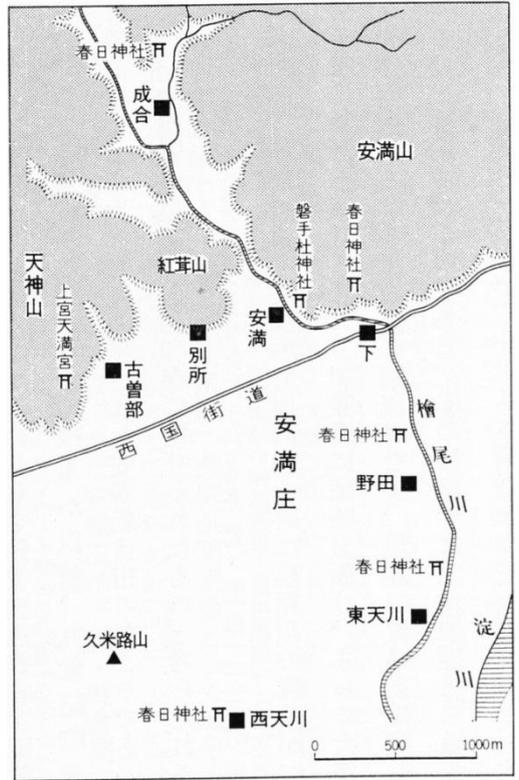


図6 安満庄略図(注5より)

神社の神宮寺としての性格を強め、室町時代の大般若経が神社に伝えられるなど、次第に地域の祭祀に取り込まれていったものと思われる(20)。

以上、冗長となったが、金龍寺の成立について、前後する安満山周辺の地域社会の動向を意識して取り上げてきた。金龍寺成立以前の安満山周辺は国家や官人層の関与が強い地域で、大規模な開発が進むとともに、水源と関連する安満寺や悉檀寺のような寺院が設けられた。これに代わったのが金龍寺であり、その背景には藤原撰関家との関係も想定された。ただし、その成立には地域社会における水源への信仰が不可分であり、やがて地域の人々の営みに定着した山岳寺院として金龍寺は存続していくことになったように思う。

#### 四 おわりに

安満山周辺地域は、民俗を含めて非常に興味深い歴史的事象が多く、近年では発掘調査の成果も上がっている。それぞれ古代にまで遡るような中身を持つ興味深い事例であるが、個別の成果では視野に限界もある。

これらは山や河川などの地域社会の大きな構成要素と関わるものが大半であり、トータルで理解すべき点も多いように思う。そして、それらを包括する一視点に成り得るのが金龍寺という山岳寺院なのではないだろうか。対象が多岐に及び、雑な実証しか行えなかったが、一つの試みとし

て、「寛容を願えれば幸甚である。

#### 【注】

(1) 天坊幸彦『千観と金龍寺』(高槻の文化財を守る会、一九六三年)、河音能平「撰関期の農村と国風文化」(『高槻市史』第一巻本編I、一九七七年)、滝沢幸恵「聖をめぐる信仰と物語」命蓮・性空・増賀・千観・法道」(吹田市立博物館平成一五年度特別展図録『山の聖たち』その信仰と物語』、二〇〇三年)。

(2) 早稲田大学図書館教林文庫蔵。同図書館HP「古典籍総合データベース」で公開されている。

(3) 『日本紀略』康保四年十月二十四日条(以下の史料は全て『高槻市史』第三巻史料編I所収)。

(4) 注1。

(5) 河音能平「中世荘園公領制の成立」(『高槻市史』第一巻本編I、一九七七年)。

(6) 『証如上人日記』天文二十年三月五日条。

(7) 高槻市立しろあと歴史館 第15回企画展リーフレット『成合 春日神社と金龍寺』(二〇一〇年)所収。

(8) 注1。

(9) 調査の概要については金光正裕「金龍寺旧境内跡」(大阪府立近つ飛鳥博物館平成24年度冬季特別展『歴史発掘おさか2012』大阪府発掘調査最新情報)を参照。

(10) 原口正三「悉檀寺跡」(『高槻市史』第六巻考古編、一九七三年)。

(11) 『日本三代実録』貞観十六年十二月二十五日条。

(12) 『類聚国史』巻百五十九・旧地部上「勅旨田」天長九年三月。

(13) 河内祥輔「勅旨田」(『国史大辞典』第九巻、吉川弘文館、一九八八年)。

(14) 狩野久「律令制動播期の三島」(『高槻市史』第一巻本編I、一九七七年)。

(15) 注1。

(16) 高谷重夫『高槻叢書第十六集 高槻の民俗 祭祀習俗を中心として』(高槻市教育委員会、一九六一年)、高槻市教育委員会『昭和47・48年度 高槻市文化財年報』(一九七四年)、西本幸嗣「成合 春日神社の民俗行事について」(高槻市教育委員会『高槻市文化財年報平成21・22年度』、二〇一二年)。

(17) 注16 高谷文獻、原泰根『高槻市民俗文化財調査報告書 磐手杜神社 馬祭・八阪神社 春祭』(高槻市教育委員会、二〇〇五年)。

(18) 『日本紀略』康保四年十月廿四日条。

(19) 注5。「撰津国安満庄目録案」(保井文庫文書、天理大学図書館蔵)。

(20) 三浦圭一「室町時代の高槻」(『高槻市史』第一巻本編I、一九七七年)、註7参照。

## 都加母止塚について

千田 康治

平成二十四年度、高槻市教育委員会では「高槻まちかど遺産」事業に着手、第一期として高槻・芥川周辺地区の26ヶ所を選定して説明板を設置した。そのうちのひとつ、旧高槻城下の八幡町に所在する「都加母止塚（つかもとづか）」について、同塚が記された史資料を整理した。

同塚は高槻市八幡町6番に所在する。ここはかつて西天川村に属し、字名は「塚本」である。現状は、道路に面した民家の塀際に位置し、周囲との段差はない。「都加母止塚」と刻まれた石碑がコンクリート製の基礎に据えられている。石碑は高さ64cm、幅42cmで、塚名以外の銘文はない（写真1）。傍らには高さ10mほどの古木がたつ。昭和三十年代の写真（写真2）からは、周囲から少し盛り上がった塚の上で、木の傍らに石碑が横たわっていた当時の状態がわかる。

はじめに、同塚が登場する地誌類を整理する。

『日本輿地通志畿内部』〔享保年間（一七一六〜三五）の編集・刊行〕

「陵墓」の項。「都（ツ）加母止（ト）冢足跡冢俱ニ西天川村ニ在」（1）

『撰津名所図会』〔寛政八〜十年（一七九六〜九八）刊行〕

「都加母止塚（つかもとづか）足跡塚（あしあとづか）ともに西天川村にあり。」（2）

『大阪府全志』〔大正十一年（一九二二）刊行〕

「荒塚あり、一を都加母止塚といひ、一を足跡塚といふ。都加母止塚は



写真1 現状



写真2 昭和三十年代の状態

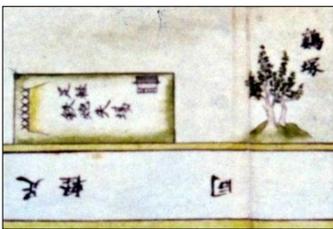


写真3 描かれた「鶏塚」

西北字塚本にあり、高さ貳尺・周圍八間にして、老欒樹の下に一碑を存し、塚名を刻せり。舊記傳説の徴すべきものなし。」

次に、高槻城の絵図に描かれた同塚を確認する。十七世紀後半と推定される「高槻城絵図」、十八世紀前半と推定される「町間入高槻絵図（共に仏日寺蔵）」には描かれていない。同塚が城下の外にあるため、描かれなかったとおもわれる（3）。天保十一年（一八四〇）の年紀がある「分間七百五拾歩壹高槻図」（個人蔵）には、該当箇所小さな盛土の上に二本の木がそびえる塚が描かれ、「鶏塚」と名が記されている。西隣には足軽屋敷、北隣には「足軽鉄炮矢場」が描かれている（写真3）。同絵図は、前二者にはなかった塚や小さな社が城下・城下外を問わず描かれていることから、作成に際して古跡に留意していることがうかがえる。塚名が異なっているが、これについては『高槻通史』に引用されている高槻藩祐筆・佐藤一徳斎安之が文政年間（一八一八〜三〇）に作った高槻の名所をうたいこんだ一文に「是三寺小路をうらへ打ちて見れば東組鉄炮場の音も馴ぬれば驚かず鶏塚も苔むして実に御代なれや万歳をうたひ」とあることから、高槻藩士の間では同塚が鶏塚とよばれていたことがわかる（4）。

以上から、「都加母止塚」が遅くとも『日本輿地通志畿内部』が編纂された十八世紀前半には存在していたことが確認できた。また、石碑に刻まれ、地誌類にも採用された塚名とは別の名があったことがわかった。しかし、いずれの史資料も塚の由緒について記したものはなく、地誌と城絵図での塚名の違う理由も不明である。今後は、さらなる史資料の発見に努め、地域に伝わる歴史遺産の調査研究をすすめたい。

### 【注】

- (1) 原文は漢文。○内はふりがな。「足跡冢」は「大道法師の碑」（高槻市藤の里）を指す。
- (2) ○内はふりがな。
- (3) 同塚は、西天川村の西端に位置する。同塚からすぐ南の同村と高槻村の境界付近に、城下への主要な出入り口の一つ、大塚口の門があった。
- (4) 天坊幸彦『高槻通史』（高槻市役所 一九五三年）。

発行日 二〇一三年三月十六日

編集・発行 高槻市立しろあと歴史館（大阪府高槻市城内町一番七号・

☎〇七二（六七三）三九八七）